

鈴鹿市郡山町
末野 B 遺跡（第 2 次）発掘調査報告書

1999.3

鈴鹿市教育委員会



航空写真

例 言

1. 本書は、鈴鹿市郡山町に所在する末野 B 遺跡の第 2 次発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、三交不動産株式会社の宅地造成工事に伴い平成 10 年 2 月から 4 月にかけて鈴鹿市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査に伴う費用については、三交不動産株式会社が負担した。
4. 発掘調査並びに遺物整理は杉立正徳（鈴鹿市教育委員会・文化財保護課）が中心に携わり、執筆・編集は中森成行が行った。
5. 本書の挿図に使用した全ての方位は座標北を示している。
なお、真北は座標北の $N0^{\circ} 18' W$ 、磁北は $N6^{\circ} 40' W$ である。
6. 本書で報告した出土遺物は、鈴鹿市考古博物館において管理・保管している。
7. 本書に用いた遺構表示の略記号は下記による。
SH：竪穴住居 SB：掘立柱建物
SK：土坑

目 次

I. 前言	1
1. 大規模造成計画と郡山遺跡群の発掘調査	1
2. 末野B遺跡の位置	1
II. 周辺の歴史的環境	1
III. 出土遺構	3
IV. 出土遺物	6
V. 考察	9

図 版

巻頭図版	航空写真	
図版2	SH 1・SH 2	12
図版3	SB 5・6, SB 9	13
図版4	SB 8, SK13	14
図版5	出土遺物	15
図版6	出土遺物	16

挿 図

第1図	末野B遺跡位置図	1
第2図	周辺の歴史的環境	2
第3図	主要遺構平面図	3
第4図	遺構実測図	4
第5図	遺物実測図	7
第6図	遺物実測図	8

表

第1表	竪穴住居の規模	5
第2表	掘立柱建物の規模	5
第3表	遺構別出土遺物一覧	11

I. 前 言

1. 大規模造成計画と郡山遺跡群の発掘調査

国鉄伊勢線（現伊勢鉄道）の中瀬古駅が開設されるに伴い、三交不動産株式会社が駅前を中心に大規模な団地造成を計画したのは昭和44年頃である。昭和48年に造成事業に関連して中瀬古駅前から台地中央部を東西に仮設道路が設置された際、多量の土器片が発見された。これが端緒となり開発区域内を分布調査したところ、広範囲に土器片の散布が確認された。これを受けて、昭和50年度に調査組織として鈴鹿市遺跡調査会が設置されるとともに開発区域全域の試掘調査に着手した。翌年度から試掘成果をもとに緑地保存される箇所を除いた約70,000㎡を郡山遺跡群と呼称して本調査を開始した。

2. 末野B遺跡の位置

末野遺跡は中瀬古駅前に突き出た標高20～23mの東西約600m南北約250mの細長い台地上あって周囲は幅70～100mの樹枝状の谷によって囲まれている。末野遺跡は広い調査面積を有することから末野A・B・C遺跡の3地区に区分した。末野B遺跡は仮設道路南側でも台地の先端寄りにあたる箇所でも約10,000㎡を調査した。

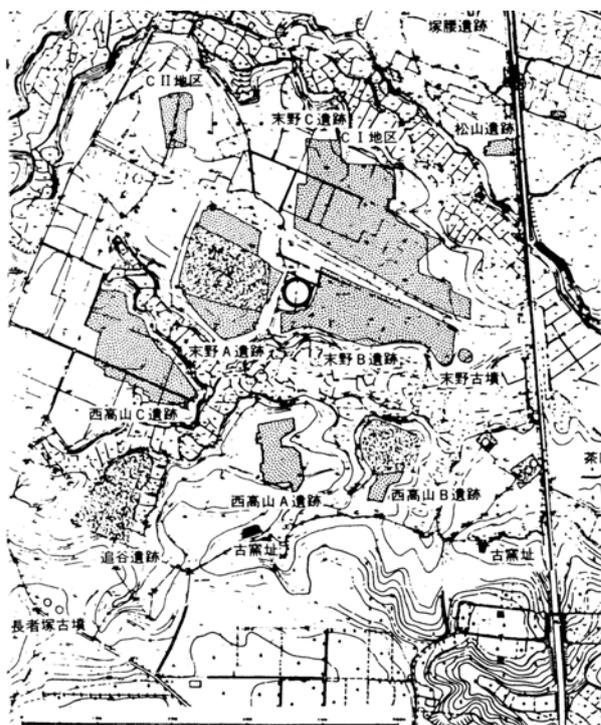
2次調査区は昭和52年度に実施した1次調査の北西隅に位置し、当時は未買収地として発掘調査区から除外され、山林の状況で残っていた箇所である。

その後、三交不動産株会社から平成9年7月9日にこの箇所の宅地再開発計画に伴い埋蔵文化財調査の依頼があり、鈴鹿市教育委員会は同年7月14日に試掘調査を実施した。翌平成10年2月23日から試掘結果にもとづき本調査に着手し、4月16日に終了した。調査面積は約1,300㎡で1次調査から数えて約20年ぶりの第2次調査となる。

II. 周辺の歴史的環境

郡山遺跡群は古墳時代を中心として奈良～平安・鎌倉時代まで存続した大規模な古代集落跡である。遺跡群内の個々の遺跡は各時代の社会構造や生産活動を反映して立地は異なっており、周辺地域の歴史的環境と併せて概観してみたい。

〔集落〕この遺跡群内に本格的な集落が営まれるのは古墳時代でも須恵器生産が始まる前、いわゆる古墳時代前期頃からである。畑遺跡（14）・中瀬古南遺跡（19）のように弥生時代から生産基盤としていた「中の川」によって形成された低湿地を臨む台地の縁辺部に集落の中心が置かれる。遺跡群内では松山遺跡がこの時期にあたり、深く入り込んだ台地からはこの時期の痕跡は薄い。



第1図 末野B遺跡位置図（1：10,000）

須恵器生産の開始に合わせるように6世紀初頭頃には、西高山B遺跡のようにやや奥まった台地への集落の進出が始まる。更に、6世紀も後半代に入ると小枝谷に囲まれた奥部の大小の台地にまで集落が拡大し、遺跡群が一番隆盛した時期を迎える。西高山A・C遺跡からは多数の竪穴住居・掘立柱建物が見つかる。この地域では一般的に7世紀前半頃から律令社会の進展とともに住居の構造も竪穴住居から掘立柱建物に移行するようである。

奈良時代には末野B遺跡のように建物配置に計画性が窺える大型の掘立柱建物群も現れ、有力者の居宅とも考えられる。建物群は棟方向から幾つかの構成に分けられようである。

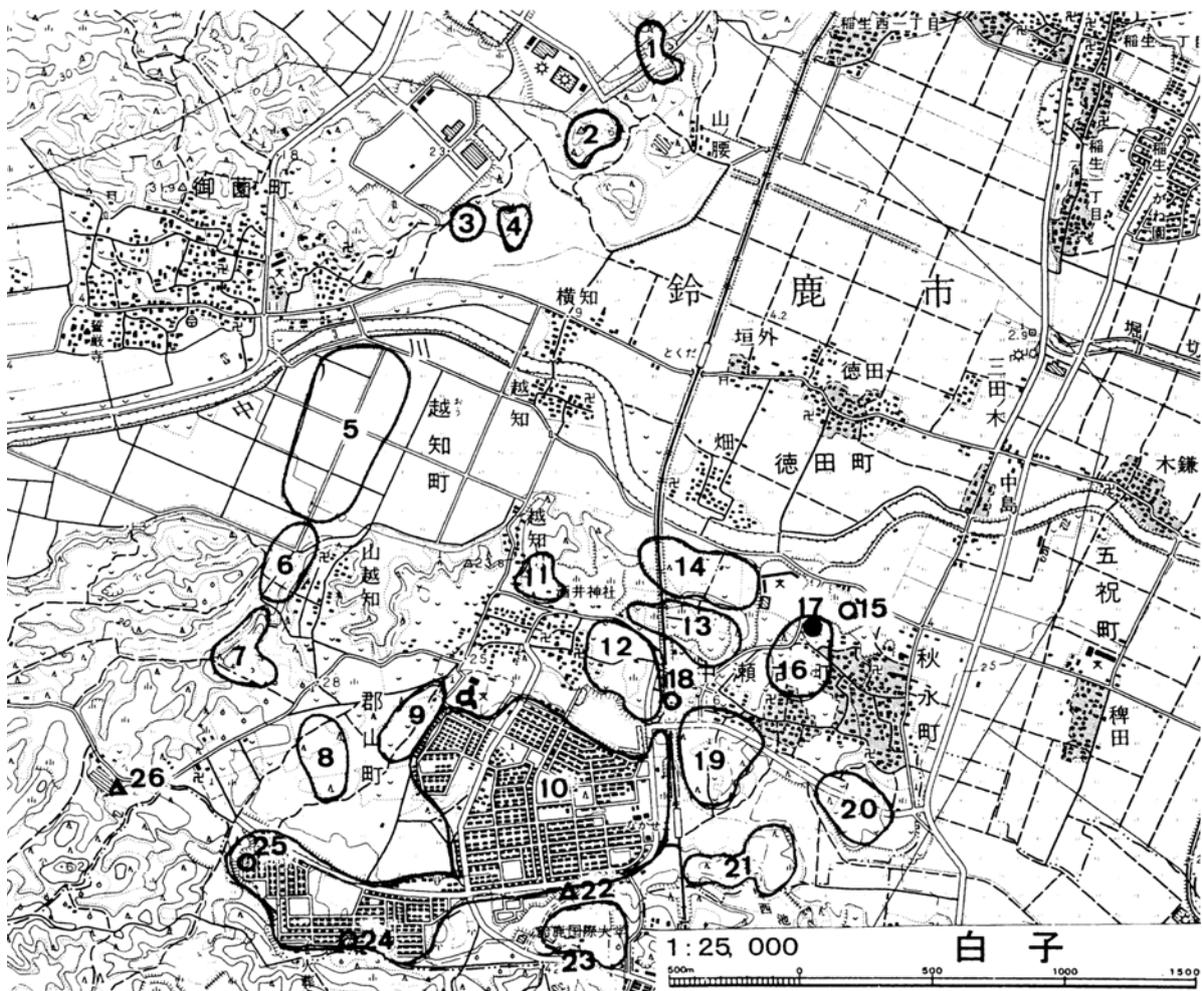
平安～鎌倉時代の集落は掘立柱建物を主体として末野C遺跡から比較的纏まって検出されている。一方、奥まった台地からは生活の痕跡は殆ど認められなく

なる。

[古墳] 古墳の分布状況は、この地域で最も古い前期古墳として、三角縁神獣鏡が出土した4世紀代の赤郷1号墳(15)をあげることができる。次に粘土槨の主体部を有する5世紀代の経塚古墳(18)、更に6世紀代には茶白山古墳群の主墳である茶白山1号墳へと続く首長層の系譜が考えられてきた。また、開発に伴って南西部の標高約20mの丘陵地からは5世紀代の黒斑をもつ埴輪が出土した西高山1号古墳(25)(円墳)、6世紀初頭の須恵器や円筒埴輪が出土した西高山2号墳(24)(前方後円墳)が確認されている。この他、茶白山古墳群(21)をはじめ大野古墳群(8)、寺谷古墳群(23)など20～30基からなる多数の群集墳は集落の拡大に伴って増加してくる。

「古窯」 西高山A遺跡の南斜面から北伊勢地方で最大規模を誇る徳居古窯跡群の一つである須恵古窯(徳居31・32号窯)が造成中に発見されている。集落の増大に伴い須恵器の量産化も飛躍的に進むようである。集落内からは窯業生産との関わりが深く、須恵器の歪正品等も多量に出土している。

[郡家(衙)推定地] 郡山遺跡群の特徴は、集落の消長と古墳群、古窯跡群の三者が互いに密接な関係を保ちながら古代社会を構成しているところにある。その後、この地域では律令社会の仕組みの中で奄芸郷奄芸郷に組み入れられることになる。これまで観たように豊かな歴史的環境を背景にその中核地をなし奄芸郡家(衙)の所在地として発達してきたことは「郡山」という町名が語っている。



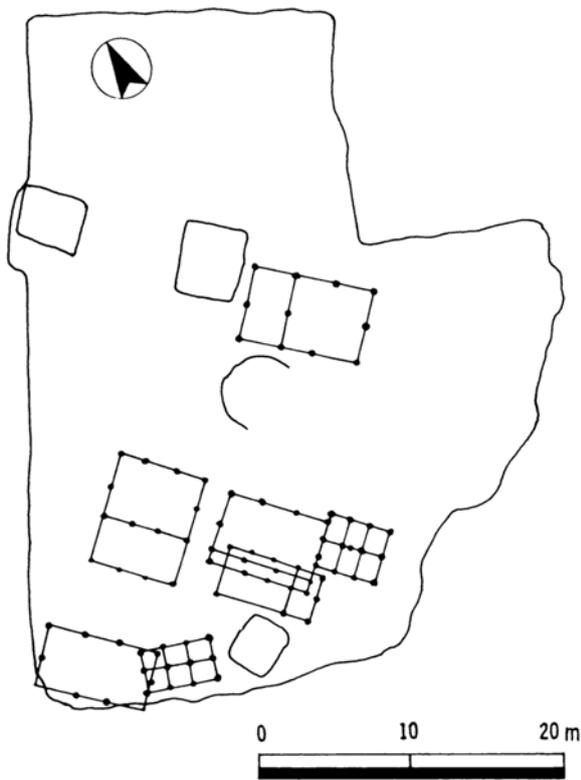
第2図 周辺の歴史的環境 (1:25,000)

1. 南谷遺跡
2. 御園間瀬口遺跡
3. 高井A遺跡
4. 高井B遺跡
5. 森ヶ坪遺跡
6. 東谷遺跡
7. 船ヶ谷A遺跡
8. 大野古墳群
9. 西川遺跡
10. 郡山遺跡群
11. 三芝遺跡
12. 塚腰遺跡
13. 染野遺跡
14. 畑遺跡
15. 赤郷1号墳
16. 赤郷遺跡
17. 赤郷2号墳
18. 経塚古墳
19. 中瀬古南遺跡
20. 大門遺跡
21. 茶白山古墳群
22. 徳居33・34号古窯跡
23. 寺谷遺跡(古墳群)
24. 西高山2号墳
25. 西高山1号墳
26. 金鈿場古窯跡(徳居7号窯)

Ⅲ. 出土遺構

調査面積は約 1,300㎡である。発掘区は全体に平坦で、台地全体が開墾後は畑地として利用されていたことから、その地境溝がE字形に残っている。

検出された遺構には、竪穴住居 2 棟・掘立柱建物 7 棟・土坑 6 基がある。発掘区の東側においては遺構密度が薄くなる傾向にあり、過去の 1 次調査もこの周辺は明確な遺構が乏しく空閑地をなしていた。西側には遺構密度の濃い末野 A 遺跡が接している。南側は約 50 m 行った所から徐々に傾斜して台地の南縁に至っている。



第 3 図 主要遺構平面図 (1 : 500)

(1) 竪穴住居

SH1 発掘区の北西隅に近いところから検出された比較的小さな竪穴住居で東半分が地境溝により壊されている。床面までの深さは約 30cm で、径 35 ~ 40cm、深さ 25 ~ 30cm の支柱穴が確認できる。その間隔は 2.21m と 1.8m と東西に少し長いことから約 4.4m × 3.6m の平面が長方形の住居が想定される。北壁の中央部に焼土が認められる。また、南壁の西寄りに 70 × 60cm、深さ 30cm の方形をした貯蔵穴がある。古墳時代の須恵器 (杯 A₂) が出土している。

SH2 SH1 から約 7 m 東寄りに検出された竪穴住居で、直ぐ南側は SB9 と接する。長軸を南北にとるが棟の向きと平面形は SH1 と似ている。住居の規模は 5.2 × 4 m で床面までの深さは約 20cm、径 40cm、深さ 30cm 前後の 4 本の支柱穴が確認できる。壁に沿って部分的に残る浅い溝状の落ち込みは壁溝なのか明確でない。東壁の中央部からやや北寄りに粘土によるカマドが残っている。床面の北東隅にも小土坑で切られるように焼土が認められる。古墳時代の須恵器 (杯 A₂) と鉄製品が出土している。

(2) 掘立柱建物

SB3 発掘区の南側で検出された建物の向きを北西から南東にとる 3 × 2 間建物。桁行 7.4 m 梁行 4 m で西側柱の中央部はわずかに狭い。柱掘方は円形で径は 40 ~ 50cm、深さ 20 ~ 30cm。南側でやや棟の向きを異にする総柱建物 SB4 と重なる。

SB4 3 × 2 間の総柱建物。桁行 3.8m、梁行 2.8m で建物面積は約 11㎡。棟の向きは他の建物とは異なり東西方向に近い。柱間は不等間で床束の並びも悪い。柱掘方は円形で径 40 ~ 60cm とやや大きい。

SB5 建物の向きを北西から南東にとる桁行 5.7 m、梁行 4.2m の 3 × 2 間建物で南側に庇が取り付く。庇の幅は約 3 m と広く、庇部分を入れると梁行は 6.7m で建物面積は約 38㎡。北側柱の柱間は 1.8+2.1+1.8m と中央部が若干広がっている。身舎の柱掘方は円形で 80 ~ 90cm に対して庇の柱穴は 30 ~ 40cm と小さい。SB3・SB5 との妻側の柱筋がほぼ通っている。柱穴から長頸壺・双耳壺の小片が出土している。

SB6 SB5 から約 3 m 離れた東側に位置する 3 × 2 間の建物。SB5 とは建物の棟方向とともに南の側柱に庇が取り付くなど共通性が窺える。柱掘方は径 40 ~ 50cm と SB5 に較べて小さい。庇の出は 70cm と狭く、柱間が不等間であることから塀などの可能性も考えられる。

SB7 東側で SB8 と重複する 4 × 2 間の細長い建物。桁行 6.8 m、梁行 2.2 m で南側の桁行 1 間分だけに間仕切りの床束をもつ。西側柱の柱穴は検出できなかった。

SB8 SB5 から約 9m 東側に位置する平面が方形にちかい 3 × 2 間の総柱建物。桁行 4 m、梁行 3.8m で



第4図 遺構実測図 (1:200)

建物面積は約 15㎡。柱掘方は円形で径約 40～70 cm と幅があり、束柱の間隔は不揃いである。SB5 とはほぼ柱筋が通っている。

SB9 SH2 の約 1 m 南側に位置し、建物の向きを北西から南東に振る 3×2 間の建物。桁行 7.8m, 行 4.8 m で建物面積は約 36㎡。北側の妻柱の間隔は 2.6m +2.2m で東側が少し広く、中央の柱位置は SH2 の西壁の筋とほぼ合致している。また、南側柱の中央部がわずかに狭く、桁行 1 間分だけに間仕切り風の床束を持つ建物構造である。柱掘方は方形にちかく、その径は約 90～110cm 前後と大きく、深さも 50cm 前後で中には約 30cm の柱痕跡が残るものもある。調査区のなかでは中心的建物と考えられる。柱穴から須恵器(杯 A_{1.2}) が出土している。

(3) 土坑

SK10 SB3 と SB5 との間に位置する 6×2.6m の細長い土坑で、南側の掘方は削平されて確認できない。深さは約 10cm と浅く、須恵器(杯蓋 B) が出土している。北西隅に径 1.2×1.1m, 深さ 20cm の円形土坑がある。

SK11 平面が方形にちかい約 4×3.4m の小さな竪穴状の土坑で、風倒木のため掘方は歪である。床

面までの深さは一定せず東側部分で約 40～50cm と深くなる。古墳時代と奈良時代後半の須恵器片が混在するとともに、刀子等の鉄製品が出土している。SK12 との切り合い関係は SK11 が新しい。

SK12 SK11 の南側で 2×1 m の長方形を呈した土坑で深さ約 20cm。

SK13 SK11 の直ぐ北東側に位置する 3.4×1.8m の楕円形を呈した土坑で深さは 10cm。古墳時代の須恵器(杯 A₂) が多数出土している。

SK14 発掘区の中央部に位置する平面が 5.2×4.5m の不正形の土坑。小土坑が幾つか重なるのか底の深さも一定せず、3×0.8m と 2.5×0.3m の細長い溝が 2 箇所認められる。調査区のなかで遺物が最も多く出土した遺構で、古墳時代の須恵器の杯(A_{1.2}) が混在して出土している。

SK15 SK14 と接する 2×1.4m の小土坑。深さ 20 cm で前後関係は不明。土馬の一部が出土している。

SK16 SK15 の東側で接する径約 1m の円形状の土坑で深さは約 40cm と深い。SB9 の柱穴との切り合い関係は柱穴の方が新しい。須恵器(杯 A₁) が出土している。

第 1 表 竪穴住居の規模

名称 (SH)	規模 (m)		深さ (cm)	南北軸	カマド位置	備考
	東西	南北				
SH 1	3.6	4.4	30	N-28° -E	東	カマド・貯蔵穴
SH 2	5.2	4.0	20	N-65° -W	南	カマド・他に焼土

第 2 表 掘立柱建物の規模

名称 (SB)	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	備考
SB 3	3×2	7.4	4.0	N-62° -W	
SB 4	3×2	3.8	2.8	N-83° -W	総柱建物
SB 5	3×2	5.7	4.2	N-58° -W	庇
SB 6	3×2	6.4	3.3	N-55° -W	庇
SB 7	4×2	6.8	2.2	N-55° -W	間仕切り
SB 8	3×2	4.0	3.8	N-58° -W	総柱建物
SB 9	3×2	7.8	4.8	N-62° -W	間仕切り

IV. 出土遺物

出土遺物は整理箱で約 30 箱ある。その多くは古墳時代の須恵器が占め、竪穴住居や土坑から出土している。

古墳時代の須恵器には杯(身・蓋)、高杯・台付碗・甕・短頸壺・平瓶・罍・すり鉢・甑など器種も豊富である。須恵器のなかには歪正品や焼生品とともに、ヘラ書きによる窯印も含まれている。

奈良・平安時代の須恵器や灰釉陶器片も出土しているが点数は限られている。その他、土師器の甕・皿や鉄製品・土製品が出土している。

(1) 須恵器

杯蓋 A 丸い天井部をもつ杯蓋はヘラ削り調整(A₁)を施すものとヘラ切末調整(A₂)の2種に分けられる。A₁の口径は11～15cm、器高3～5cmである。A₂は口径12～13cm、器高3cm前後で何れも法量にばらつきはあるものの概してA₁の方が大きい。

杯蓋 A₁ (1～8) 1～3は天井部の約1/2を丁寧にヘラ削りする大型の杯蓋である。焼成は堅く窯壁・須恵器片が付着する。4・5は稜も鈍く天井部と口縁部を分ける部分に凹線がわずかに残る。4は肩平な天井部で壺の蓋とも考えられる。窯印がある。7は天井部のわずかな範囲をヘラ削り調整する。8は丸い天井部とやや外反気味の口縁からなる。器壁は薄く、壺の蓋とも考えられる。

杯蓋 A₂ (9～17) 天井部はヘラ切り後は未調整のままのもので9は天井部を丸く仕上げる。15は天井部をヘラ状工具で叩いて調整する。17は口径10.4cm、器高3.6cmで最も小さな器形。

杯蓋 B (20～23) 20はヘラ削りを施した天井部の中央に中凹のつまみが付き、かえりは口縁部より外側に出る。有蓋高杯の蓋とも考えられる。21・22はいずれも宝珠のつまみを欠損する径約9～12cmの小さな杯蓋で天井部の1/2ほどをヘラ削り調整。22は天井部が平らでかえりの先端が口縁端部以下に突出しない。23は局平なつまみをもつ蓋で、丸い天井部のほぼ全体をヘラ削り調整。

杯蓋 C (24) 口径約20cmの大型の蓋で、口縁端部は短く屈曲する。破片で天井部の調整方法は不明。

黄灰色で焼成は甘い。

杯身 A 内傾する短い立ち上がりをもち、底部にヘラ削り調整(A₁)を施すものとヘラ切末調整(A₂)の2種に分けられる。A₁の口径は11～13cm、器高3～4cmで、A₂の口径は10～12cm、器高3～4cmであることから全般的にA₁の方が大きく感じる。

杯身 A₁ (25～33) 25・26・29は口径が13cm前後と最も大きな器形で、杯蓋(1～3)と組み合わせるもの。29は亀の甲のように大きく歪み、焼成は堅く黒色をなしている。33は底部の僅かな範囲をヘラ削り調整し杯蓋 A₁ の7と似ている。

杯身 A₂ (34～43) 34は短い立ち上がりと受け部は丸い凹面をなしている。39・40は口径12cm前後でA₂類のなかでは最大形のもの。何れも未調整の底部にはヘラによる窯印がある。43は最小形のもので、口径9.8cm、器高3cm。

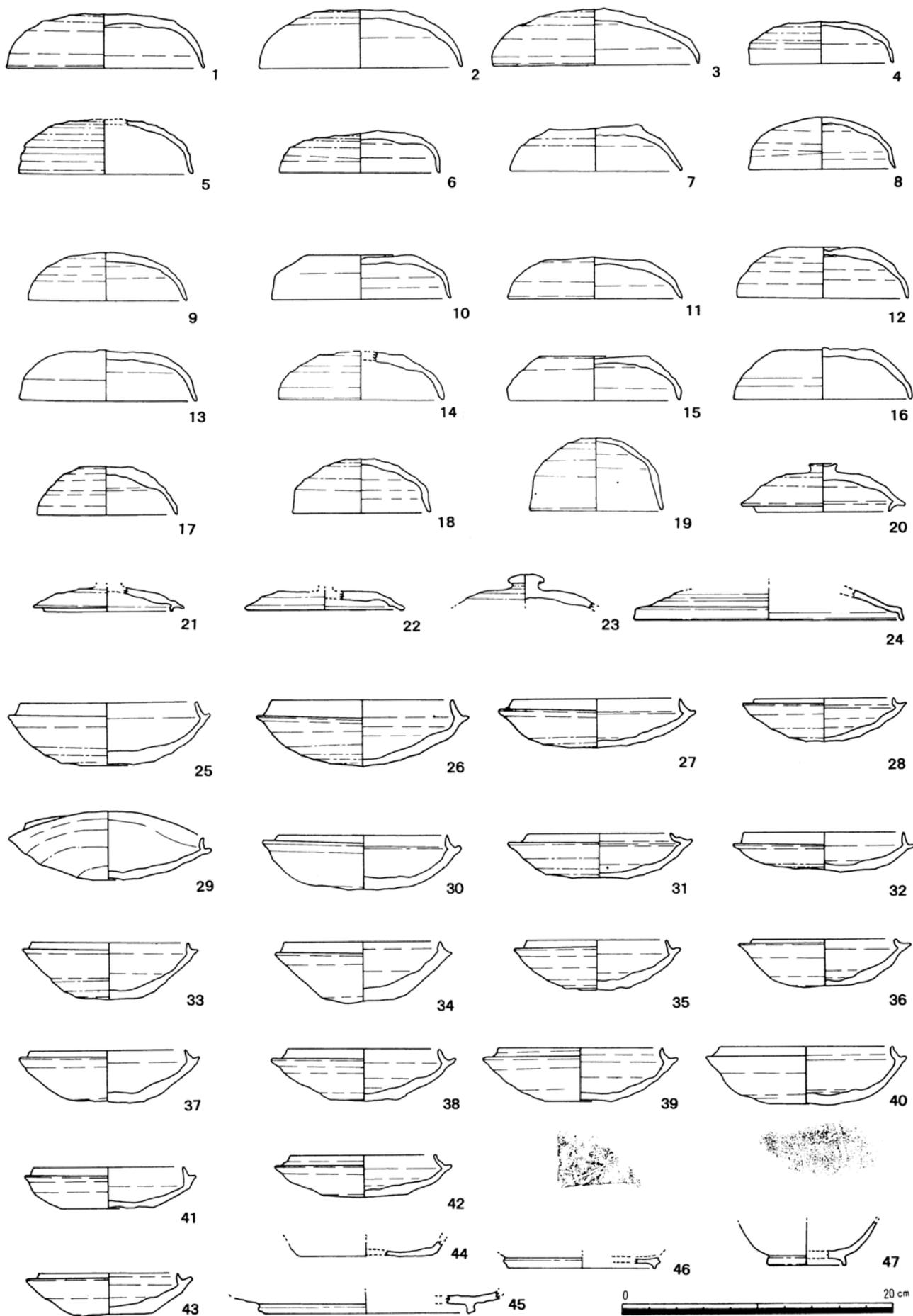
杯身 B 杯蓋 B 類に伴う典型的な杯身を確認することができなかった。杯の蓋と身が逆転する時期でもあり、杯蓋 A₂ 類とした中にこの器形が含まれていることも考えられる。

杯身 C (44～46) 44は糸切り底のままの杯で底部の径は約10cm。明灰色で焼生品。45は扁平な底部に短い高台が貼りつく。高台の径は約15cmと大きく端部内側で接地する。皿か盤に近いものと考えられる。46は高台部分の細片で、底部に糸切り痕が残り、高台の端部はつまみ出されたように凹面をなして内側で接地する。

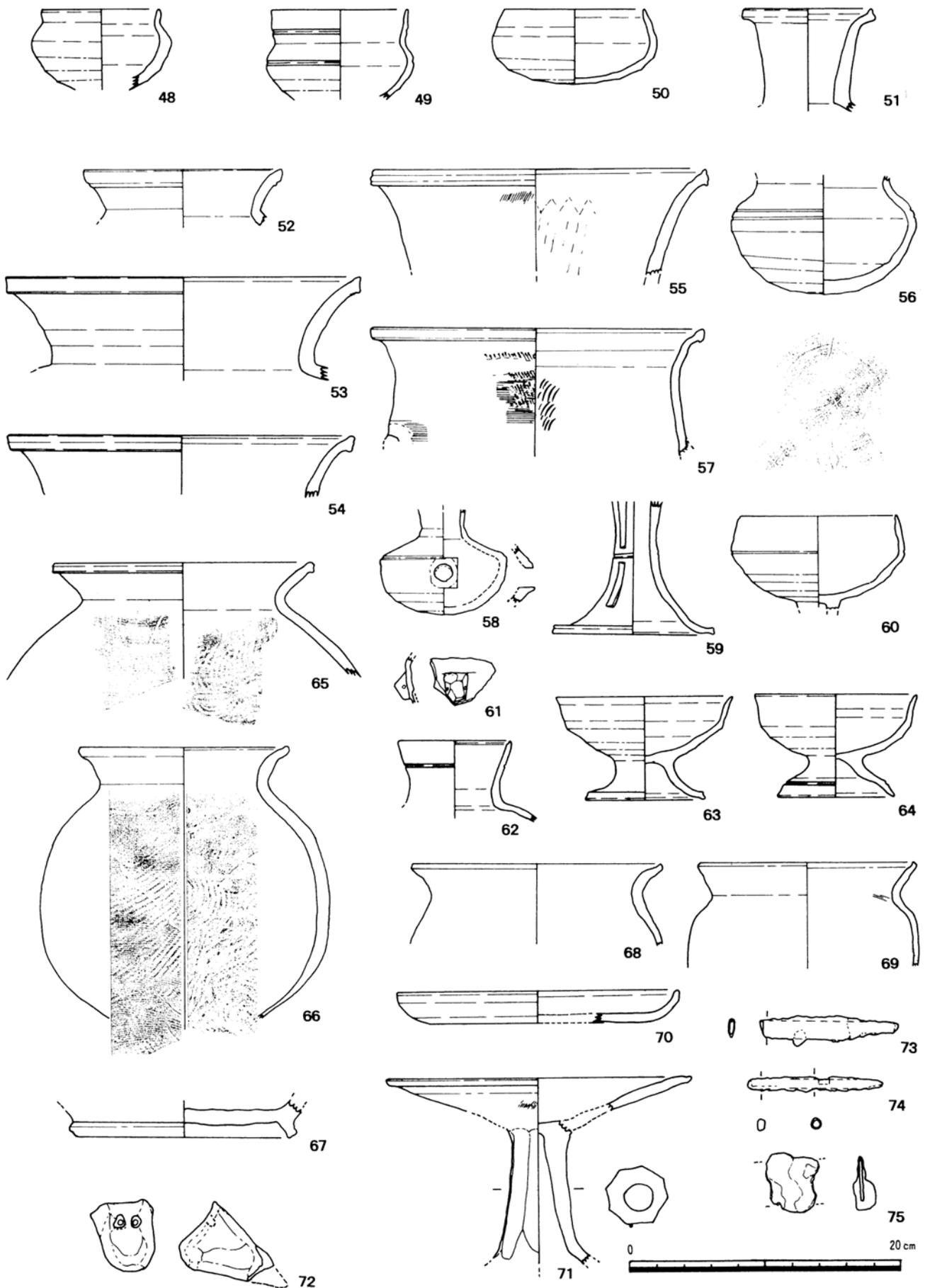
短頸壺蓋 (18・19) 18は口縁部が外反気味に屈曲する口径約10.4cm、器高4cmの蓋。天井部はヘラ削り調整で焼成は甘く灰白色。19も外反気味に真直ぐ下に延びる長い口縁部で口径に較べて器高が5.4cmと高い。天井部は丁寧にヘラ削り調整を施し、焼成は少し甘い。

短頸壺 (48・49・56) 48は口径8.8cmで短い口縁部がわずかに外反する。体部の器壁は0.4cmと厚い。49の長い口縁部はやや開き気味に真直ぐ上に延び、沈線が一条めぐる。体部の器壁は0.3cmと薄い。56は口縁部を欠損し肩部には2条の沈線を施す。底部に「×」印の窯印がある。

鉢 (50) 口径約10cmで体部は丸く内弯し1/3をヘラ削り調整。



第5図 遺物実測図



第6图 遺物実測図

台付椀 (63・64) 63は口縁部が屈曲し 外に広がる口径13cm、深さ4.2cmの大きな杯部と外側に踏ん張った小さな脚部からなる。64は口径12cmで63に比べやや丸味をもった杯部と外側に踏ん張った短い脚部からなる。脚部には沈線がめぐる。

甗 (58) 約3cmの細い頸部と肩が張った体部からなる。肩には細い沈線がめぐり、それより下部に突出した注口部が付く。

長頸壺 (51・67) 51は口径9.2cmで口縁端部をつまみ出し、やや受け口状になる長頸壺の頸部。67は長頸壺の底部で、ハの字形に太い高台が貼りつき、端部は凹面をなし内側で接地する。

甗 (55・57) 55は口径約20cmで大きく開き、口縁端部の小さな面は稜をなす。外面はかすかに平行叩きの痕が残り、内面は下から上部にかけて丁寧なへら削り調整を施す。57は口径約25cm。緩やかに外反する口縁部と膨らみ気味の体部とからなり、把手の剥離痕がある。外面は平行叩きの後にカキ目調整を施し、内面には同心円状の叩きがある。焼成は甘く灰褐色。

平瓶 (62) 口径8.5cmで外反気味の平瓶の口縁部。上部に細い沈線がめぐり、端部内面には小さな段をもつ。

高杯 (59・60) 59は脚部の裾が11.8cmと大きく開く2段2方透かしの長脚高杯で脚の中位に1条の沈線を施す。出土品のなかに2段3方透かしの高杯もある。60は口径11.4cm深さ5.8cmで内弯気味の無蓋高杯の杯部。底部に丁寧なへら削り調整を施し、口縁部と体部を分ける間に細い凹線がめぐる。

甗 (50～54・65・66) 52は口径14.8cmの小型の甗で肥大した口縁端部に幅の厚い帯状の面をもつ。焼成は甘く灰白色。53は口径26cmの大きく外反する甗の口縁部で端部に幅の広い面をもつ。54は口径25.4cmで口縁端部は小さな稜をもつ。65は大きく外反する短い口縁部で端部は少し肥大し丸くおさめる。外面にはかすかに並行叩き痕、内面に同心円状の叩きが残る。焼成は甘く灰白色。66は口径15.5cmで緩やかに外反する短い口縁部と丸い体部とからなる。外面は平行叩きの後にスリ消し調整。内面には同心円状の叩きがある。

(2) 灰釉陶器

杯 (47) 内弯気味の高台をもつ灰釉陶器の底部。高台の径は約6cmで内面に施釉の痕が薄く認められる。

双耳壺 (61) 2×1.5×1cmの小さな粘土板を貼りつけた双耳壺もしくは四耳壺の耳部分。小さな孔を穿ち緑黄色の釉が被る。2点出土している。

(3) 土師器

甗 (68・69) いずれも口縁部が強く外反する甗で端部はつまみ上げる。68の口縁部は肥厚し、胎土は荒く調整方法は不明。69はやや肩の張る体部を持ち、内面に刷毛目調整を施す。

皿 (70) 口径28cm、高さ2.4cmの皿。へら磨きの痕跡がかすかに残る。口縁部の内外面はヨコナデ調整で赤褐色。

高杯 (71) へら削りした断面七角形の長い脚部と口径約22.6cm、深さ3.6cmの浅い杯部からなる。杯部は全体にへら磨きを行い、口縁部付近はナデ調整。

(4) その他

土製品 (72) 三角状の手づくねによる土製品。平坦面には剥離痕が残る。厚みは4.8×5cmで下面には棒状のもので突いた小さな穴が2箇所認められ、土馬の顔の一部か。焼成は甘く灰白色。

鉄製品 (73～75) 73は刀身の一部を欠損する刀子。残存長10cm、身の幅1cm、身の厚み0.2cm。74は現存長が10cmの棒状の鉄製品で一端が尖っている。断面は丸く約0.6cm。75は幅3.5cm、断面は約0.2cmの薄い板状の一部で錆の腐食が著しい。

IV. 考 察

1次調査と同様に掘立柱建物を主体とした古墳時代後半から奈良・平安時代に存続した古代集落である。検出された遺構には、竪穴住居2棟、掘立柱建物7棟、土坑6基がある。

竪穴住居の2棟はこれまでの調査で見つかった6世紀代に遡る竪穴住居とは異なり、平面が長方形にちかく、規模も16～20㎡と狭いのが特徴である。

この地域では律令社会の仕組みが整ってくる7世紀

前半代から、竪穴住居の縮小化とともに住居の構造も掘立柱建物に変化するようである。竪穴住居は掘立柱建物群の棟方向とも良く似ていることから。両者に大きな時期差があるのではなく、むしろ幾つかの建物、例えば非常に近接しているがSB9とSH2のように厨房的な施設の性格を含め向時に存在したものと考えたい。

掘立柱建物の多くは3×2間が基本形となり。ほぼ北西―南東の棟方向におさまるなど建物の構成にあたって一定の計画性も窺える。建物群の時期についてはその重複関係から、少なくとも2つ以上の時期差が考えられるが、周辺の出土遺物等をもとに7世紀前半代を中心に8世紀後半代までのなかで大きく捉えたい。

建物群のなかに倉庫風の総柱建物は2棟含まれている。過去の調査においてもこの周辺から5棟が集中して検出されており注目さおしる。倉庫の機能・性格上から、居住用の建物群からやや離れた場所が意識的に選ばれ倉庫群としてこの一画を占めていたとも考えられる。集落共有の倉庫形態をとるものだろう。

この他、建物群のなかには1次調査でも見つかったいる柱間1間分だけに間仕切り風の構造を持つ建物が2棟(SH5・8)検出されている。

出土遺物は、7世紀前半代を中心とする須恵器が他を凌駕している。杯A類にはA₁、A₂と調整方法に違いが認められ、わずかな時期差はあるのだろうが、SK14等からは両者が混在して出土している。この他、集落からは古窯跡に隣接していることもあり、歪正品・焼生品や窯壁が付着したのも多数出土している。また、窯業生産が最も活発に行われる時期でもあり、須恵器の器種はバラエティに富んでいる。一方、杯B・C類の須恵器は出土点数も少なく、明確にこの時期の遺構を特定することは難しい。

集落の構成は、末野B遺跡^①よりも直ぐ西側に展開するA遺跡の建物方向などと共通する要素が多いことから、調査区はその周辺部にあたるものと思われる。

今後予定されている末野A遺跡の遺物整理を待って、建物群の性格等について再検討を行っていききたい。

〔註〕

末野B遺跡調査概要 1978 鈴鹿市遺跡調査会

第3表 遺構別出土遺物一覧

遺物 遺構	須 恵 器													灰 釉		土 師 器			その他					
	坏 蓋			坏 身			短 頸 壺 ・ 蓋	甕	高 坏 ・ 蓋	鉢	甑	甗	平 瓶	長 頸 壺	台 付 椀	双 耳 壺	坏	皿	甗	高 坏	鉄 製 品	土 製 品		
	A	B	C	A	B	C																		
	A1	A2		A1	A2																			
SH2		8																				75		
SB5								54						51		61								
SB9	12	14			33	38								67							68			
SK10			23																					
SK11	13				39	40								62		63							73	74
SK12								19													69			
SK13		17			34	36	37		56															
SK14	1	7			25	35		18	65	20						64								
	3	9			28	41		48		59														
	4	10			30	42		49		60														
	5	11			31	43																		
	6																							
SK15	2	15			27									57										72
SK16		16			26				66					58										
					29																			
					32																			
※ その他			21	24				45						62				47	70		71			
			22						52		50													
									53															



SH1 (東より)



SH2 (東より)



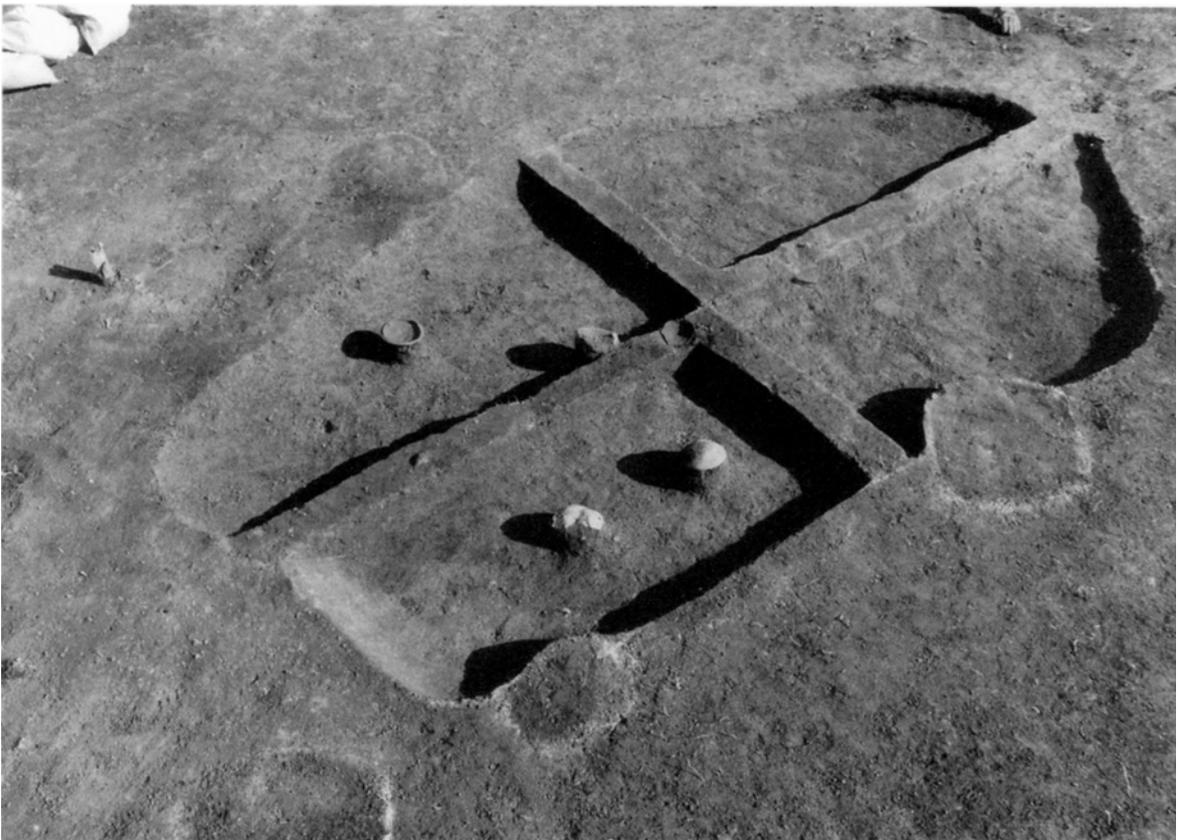
SB5・6 (東より)



SB9 (東より)



SB8 (東より)



SK13 (東より)



1



3



4



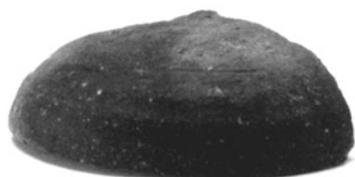
6



7



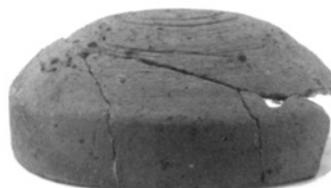
8



9



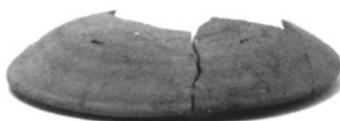
14



18



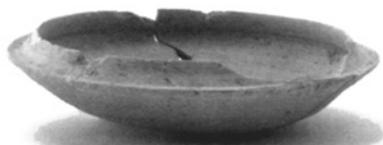
20



21



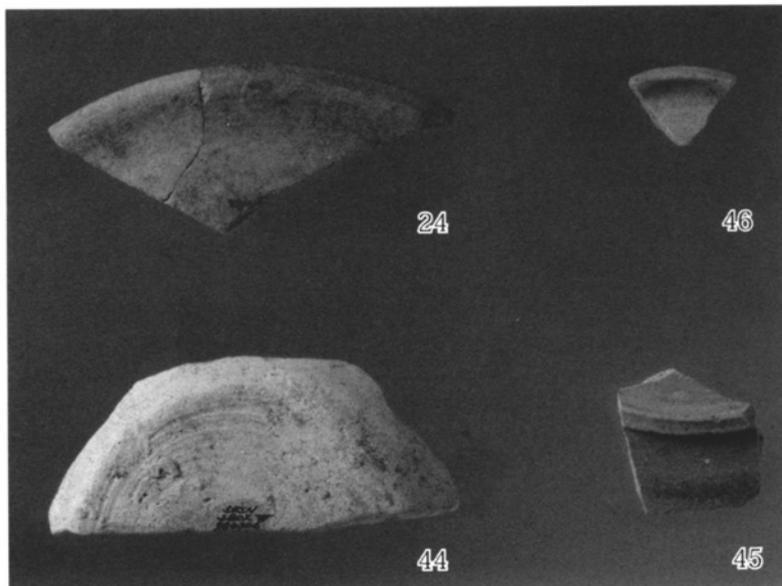
23



27



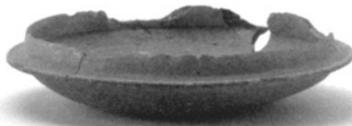
29



出土遺物



30



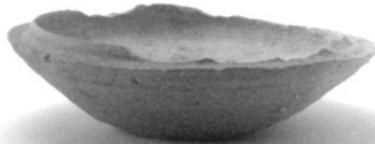
32



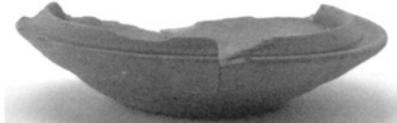
33



34



37



43



50



56



51



55



57



58



59



63



64



66



68



61



72



70



71



73



74

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すえのBいせき(だい2じ)はくつちょうさほうこくしょ							
書名	末野B遺跡(第2次)発掘調査報告書							
編集者名	中森 成行							
編集機関	鈴鹿市教育委員会							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224 Tel059(374)1994							
発行年月日	1999年3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
すえのB 末野B	鈴鹿市郡山町	市町村	遺跡番号	34° 48' 46"	136° 32' 23"	1998年2月 ~ 1998年4月	1,300㎡	宅地造成工事
		24207	667					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
末野B	集落	古墳, 奈良	竪穴住居, 土坑 掘立柱建物	須恵器, 土師器, 鉄製品 土製品				

鈴鹿市郡山町 末野B遺跡（第2次）発掘調査報告

1999年3月

編集 鈴鹿市教育委員会
発行

印刷 早川印刷株式会社